商材・サービス

オンラインショップ開設

食器・衛生管理・入浴介助製品など取扱い

京都市に拠点を置く老舗の食器メーカーであるセントラルは先月、現場の課題解決をする製品を厳選した介護事業者向けオンラインショップ「京の器プレミアムショップ」を開設した。食器はもちろん、机や椅子、衛生管理・入浴介助製品など、衣食住空間を提案する製品を取り揃える。

▲食の楽しみを追求

京の器事業責任者
八木幸司氏

セントラル

衣食住空間を提案

――「京の器」のブランド創設経緯は。

八木　当社は京都市南区に本社があり、東京近くに関東営業所、さらに越前漆器、美濃焼、有田焼の産地である鯖江、土岐、有田に事業拠点を有します。セントラルの名前の由来はもともと京都市の中央市場に中央漆器として店を構え、越前漆器の製造・販売を開始したことです。その後、飲食店向けに品揃えと安さを強みに食器のみならず家具、日用品などを販売する事業を60年余り進めてきました。

「飲食店の必須アイテムが何でも揃う」というスローガンを掲げていながらも、介護施設からもノンスリップ加工を施したお盆などを中心に注文をいただいていたことから、この度介護業界に本格参入し、安全・快適・利便を重視したプレミアム製品のみを厳選して提案するオンラインショップ「京の器プレミアムショップ」を5月10日に立上げました。スタッフや利用者の衣食住空間における課題や悩みを解決する製品を揃えています。

また、オンラインショップに加えて、机、椅子、食器類、サイネージなどの質感を実際に感じられる介護事業者向けのショールームも京都の奥嵯峨地区にオープンしました。

――京の器プレミアムショップの特長は。

八木　特長は主に①スタッフの作業負荷を軽減できる製品を厳選しているため、結果として介護施設の運営コスト削減につながる、②利用者にとっても安全・快適を満たす製品のため、QOL・ADL向上に寄与する、③飲食店の利用シーンに応じて食器類の提案をしてきた知見を活かして、介護施設においても食の楽しみを提案する、④当社の産地拠点や戦略調達拠点を活かして、厳選した良い物を業界最安値に挑戦する、の4点あります。

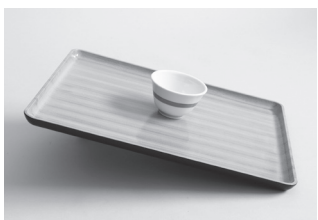
――商品例は。

八木　ノンスリップのお盆は左右に揺らしても倒れにくいため、持ち運ぶ際も安心です。新色のメイプルカラーは利用者から人気の高い製品です。耐熱のため、食洗器にも対応しており、利便性にも配慮しています。自社製の越前漆器で直販のため、一番のおすすめのメイプル・約39センチサイズは2000円台、セール価格は1500円台と、業界最安値としました。

テーブルは天板に抗ウイルス・抗菌・消臭の加工を施し、利用者が手に触れやすい側面にも抗ウイルスの塗装を施しました。木曽職人が一つ一つ手作りで仕上げており、和の雰囲気が感じられる製品です。また、従来比で約20%の軽量化を実現し、利便性も高めました。木曽エリアの戦略調達拠点を活かし、現在8万円を切るセール価格で提案しています。

――今後の展望について。

八木　今回の立上げ段階では、介護施設向けに約250品を揃えていますが、現場の生の声を聞きながら、製造・調達ルートを活かして、厳選した製品を開発し、ニーズに応えられる製品を拡充していきます。また作業療法士、歯科衛生士、管理栄養士などの専門職からもアドバイスを頂き、食べる楽しみを届けられる製品を開発していきたいと思います。



▲持ち運びも安全なノンスリップ盆

▲抗菌・消臭加工を施したテーブル

第38回　96歳の時計店店主

モノを大切にする重要さ

星川　安之氏

東京の西荻窪駅南口にある「須田時計店」は、72年前に開業。店主の須田喜八郎さんが25歳の時だった。

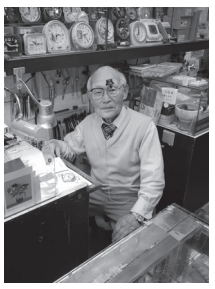
16歳で精密機械会社に入社、時計の基礎を学び、並行して、時計職人の叔父に、技術を学び時計店を開店させた。当時は夜11時まで仕事をしていたため、ほろ酔いで帰宅する人たちが目印にし、「西荻窪の灯台」とも呼ばれていた。

そんな須田さん、50歳の時、身体に異変がおきた。病院で「運動不足が原因かも」と言われ、さっそくジムに通い、毎週のように山にも登り始めると、みるみるうちに体調が回復、96歳の今も毎日、難しい修理に応じている。70年間で修理した時計は数知れず、直せなかったものは記憶にないと言う。秘訣は「共同作業です。修理は、壊れた芯棒、歯車、ネジなどを交換しなくてはいけません。それら一つひとつは、専門家がいます。その仲間たちが部品を提供しあい、お客様の時計をまた動くようにさせてもらっているのです」。

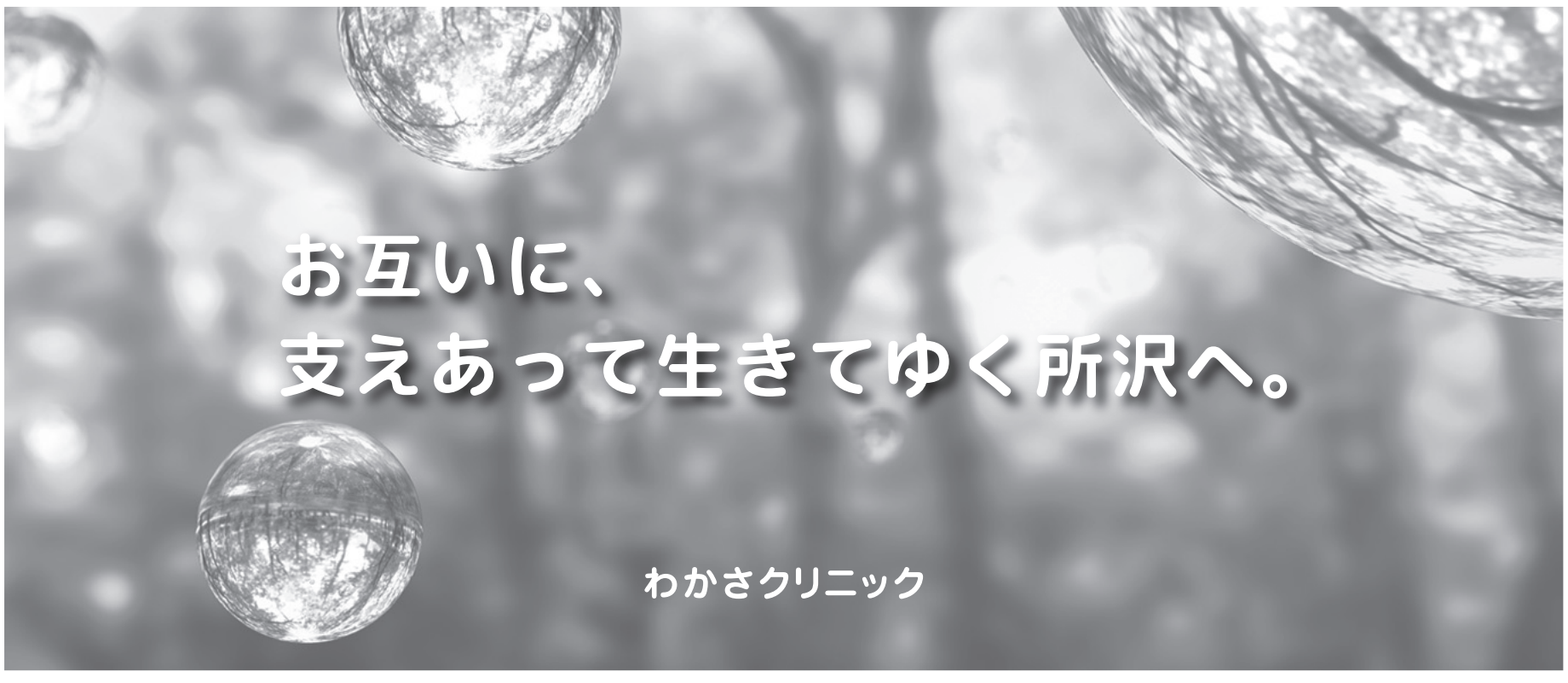
私の時計のベルトが壊れ、同じ地域の別の時計店に行った際、「この時計に合うばね棒がうちにはないの。この先の時計店のご主人は器用だから治してくれると思う」と紹介された店が、「須田時計店」だった。

紹介された店に行くと眼鏡に小型のルーペを付けた須田さんが、「どれどれ、ううむ、このバネ棒は曲がってしまっているね」と、曲がったばね棒を器用に外し、22ミリの新たなばね棒を付けてくれた。

使い捨て時代に、モノを大切にする重要さを再確認させていただくと同時に、お客の気持ちを自分事のように受け止めてくれる店が、いつまでも続いてほしいと思った次第である。



▶須田喜八郎さん

▶灯台のような「須田時計店」

星川　安之（ほしかわ　やすゆき）
公益財団法人共用品推進機構　専務理事
年齢の高低、障害の有無に関わらず、より多くの人が使える製品・サービスを、「共用品・共用サービス」と名付け、その普及活動を、玩具からはじめ、多くの業界並びに海外にも普及活動を行っている。著書に「共用品という思想」岩波書店　後藤芳一・星川安之共著他多数